

インディアナポリスにおける日本人の子ども¹⁾

梶田正巳 西口利文^{2) 3)}

I はじめに

筆者は1999年12月1日から9日までの間、インディアナ州の州都インディアナポリスに滞在した。そして、日本人の子どもたちが異文化に適應する過程で、言語、学力、アイデンティティに関していかなる影響を受けるかについて理解する目的で調査を行った。毎週土曜日に開講される日本語補習校である、インディアナ日本語学校に協力していただき、そこに通う児童・生徒、保護者、さらには補習校の教師、児童・生徒が月から金曜日まで通っている現地校の教師たちにインタビューを行うことを中心に調査はすすめられた。

本論では、先述の目的を踏まえながら、インタビューでの結果をもとに、日本人の子どもたちの異文化適應がうまくいくかどうかを左右すると考えられる要因について、子どもたちをとりまく環境の要因、子どもたちそれぞれの属性の要因とに大別して報告していくことにする。

II 子どもたちをとりまく環境

1. 補習校

インディアナ日本語学校は1981年に開校し、幼稚部27名、小学部185名、中学部63名、高等部26名が在籍している(1999年4月1日現在)。使用校舎はインディアナポリスにある私立のThe Orchard Schoolを借用しており、平日の事務も、この学校内の部屋を借用して行われている。政府派遣教員は1名(校長)で、平日は事務員

との2名で業務を行っている。講師は23名(幼稚部2名、小学部12名、中学部5名、高等部3名、国際部1名)で、約半数がグリーンカードを取得している。残りの講師の多くは家族で駐在している。単身で学生として滞在している講師は少ない。半数以上の講師が日本の教員免許を持っている。

年間の運営費は約30万ドルで、収入の内訳を大まかに示せば、およそ4分の3が授業料、残りは企業出資と政府補助から成り立っている。支出は、人件費が3分の2程度を占め、校舎の賃借料が2万6千ドル、残りが運営費となっている。スクールバスによる登下校が行われているが、バスの契約については、4つの地域別に行われており、補習校は直接関与していない。

小学部の1~4年生では国語・算数、5、6年生ならびに中学部では国語・算数(数学)・社会、高等部では国語・国語表現・小論文・数学・現代社会の授業が行われている。授業内容については、子どもの帰国後のことを考慮して、平成14、15年から施行される新学習指導要領を見据えた再検討を行っているとのことであった。1クラスはおよそ15人前後で構成されている。ただ高等部の3年生になってくると、土曜日に行われるSATおよびTOEFLの受験と重なり、生徒はそれらを受けることが可能なだけ受けるということもあり、補習校の方は休みがちになるとのことだった。また授業後に、実際に授業をすすめている何人かの先生に話をうかがい、普段補習校で授業をされていて感じていることをあげていただいた。「クラスの人数は、ある程度まで一人ひとりに目が行き届くぎりぎりの範囲です。」「全体的に授業自体は成り立つんですけど、1週間に1回しかできないですから、個々の能力、問題点に沿って手助けをする時間はないんですよ。私の手助けで子どもの学力が伸びたかっていわれると、なかなか難しい。」「復習をするっていう時間はないですから。」といった内容であった。また、現状より良い指導をするうえで、どういった道具やサポートがあればいいかをたずねてみた。先生方からは、「日本の授業風景のビデオテープ」「教材が少なすぎるので

1) 本研究は、文部省科学研究費補助金・基盤研究(A)国際学術調査 課題「北米地域に在住する日本人海外子女の異文化適應調査研究—言語・学力・アイデンティティの評価」(代表者:梶田正巳)の一環として遂行されたものである。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生

3) 本文中に記されている「筆者」である。

ドリルやワーク類」「日本の学校の指導要領は補習校の現実とは離れているので、補習校用の指導マニュアルのようなもの」といった回答をいただいた。補習校のみで、日本の教育環境に適應できるように児童・生徒の学力を十分に支援することが、時間的な制約や、限られた教材という点からかなり厳しいという現実が、先生方の話を通じてうかがうことができる。

補習校についてどう思っているかという問いに、現在高等部に在籍しているAさんは、「補習校では日本人の友達と会えるのがとてもいいかな。普段抱えてるストレスが、日本人としゃべることによって解消されるから」と語った。特に渡米間もない子どもたちにとっては、日本語を自由に使える補習校という場合は、ストレス解消としての役割が大きいようである。一方である講師からは、補習校が子どもたちにとって、過度にストレス解消の場となっているために、友だち同士での会話がはずみ過ぎて、授業の進行が妨げられることもあるという話も耳にした。

小学部の5年生のBさんとCさんに、「補習校と現地校の勉強は、どちらがたいへんですか」とたずねたところ、二人とも「補習校」とこたえた。理由は「現地校は宿題が少ないんだけど、補習校は宿題が多いから（Bさん）」「だって、日本語って、漢字があるから（Cさん）」ということだった。一方、高等部1年生の生徒たちに同様な質問をしたところ、「現地校」という回答が多かった。「現地校の宿題は、量が多いし、時間がかかる（D君）」「現地校の勉強だと、単位を落とされる可能性があるから、プレッシャーがかかる（Eさん）」という理由を耳にした。高等部の生徒のほとんどが、家庭学習における現地校と補習校の勉強時間の比率は9：1から10：0でだというふうに語った。また、高等部3年生で、日本での帰国子女枠で受験を控えているFさんは、日本語、漢字の勉強を意識しているということであった。学年や置かれている立場によって、日本語による学習の重みづけが異なっている様子がうかがえる。

2. 現地校

海外から来た子どもたちの英語教育をサポートする仕組みは、現地校ごとに若干異なっている。それらの様子について、概観してみることにする。

① E S L クラスのある現地校

インディアナ日本語学校に通う子どもたちの多くは、月曜から金曜までの間、彼らが住む地域にある公立の現地校に通っている。彼らは現地校で、地元の同世代のアメリカ人たちとともに勉強している。現地校には、E S L (English as a Second Language) クラスという英語学習の場が設けられているところがある。海外から

の在留者の多い地域の学校では、たいていE S L クラスが設置されている。筆者は、Lantern Road Elementary School, Harrison Parkway Elementary School, Fisher Junior High School, Carmel High SchoolのE S L クラスを見学する機会をいただいた。

Lantern Road Elementary Schoolでは、E S L 教師と2年生の日本人男子児童1名との、マンツーマンで授業をしている様子を見学した。全体で30分ほどの授業であったが、様々なカードや学習器機を使用し、いろいろな内容の指導が行われていた。一例として、授業ははじまってから、カードを使って前置詞の用法についての勉強を行っていた。カードには、on, behind, under, between, in等の前置詞が一枚ごとに書かれたものと、虫がニンジンの「間」にいたり、リンゴの「中」にいたりといった絵が一枚ごとに描かれたものの2種類があった。子どもには、2種類のカードが対応するように並べさせていた。教職経験年数5年のE S L 教師は、遊びを通じて勉強させることの重要性や、いわゆる「赤ちゃん言葉」を使わずに指導する必要があることなどを話してくれた。

Harrison Parkway Elementary SchoolのE S L においても、マンツーマンの授業が行われていた。筆者が見学したときは、4年生の日本人女子児童が授業を受けていた。40分の授業の中で、英語テキストの読みとりおよび内容理解を確認するワークを実施したりしていた。また別の課題として、A Adj Sv V ……といった品詞を表す略語（Aは冠詞。文法的に正しい一文が構成できる順序で示されている。）が書かれてある紙を、子どもに渡していた。子どもは各略語の下に、各品詞に該当する単語を自由に書きながら、ひとつの意味をなす文をつくっていた。E S L 教師は、文法を教えることの重要性を語った上で、先のような課題がそうした意図に基づくものであることを話してくれた。

Fisher Junior High Schoolでは、7名の生徒が在籍し、うち4名が日本人（すべて男子生徒）であるというクラスを見学した。50分の授業時間の中で彼らが主に取り組んでいた課題には次のようなものがあった。教室前方のスクリーンに、空港のロビーが描かれたスライドが提示され、その絵にはたくさんの職員や旅行者が描かれている。そして描かれている人物になって、会話を構成したりするといったものである。ロールプレイングを取り入れた状況学習である。

Carmel High Schoolでは、日本人2名に加え、ナイジェリア、香港、ドイツ出身の計21名の生徒が授業を受けていたクラスを見学した。この日の授業は、E S L 教師が本を朗読し、途中、内容や語句について生徒を指名して答えさせるというものや、宿題だったプリント

(文の空欄に、a few, a little, few, littleのいずれかを補充する問題)の答えあわせ、解説などであった。メインストリームクラスについていけるように、生活言語と学習言語の両方を学ばせることを考慮しており、センテンス単位ではなくパラグラフ単位で英語を学ぶことが重要であると、18年の教職経験を持つESL教師は語られた。

概して授業の様子は、それぞれのESL教師の考え方や、海外からの子どもたちの在籍人数などによってかなり多様であることがうかがえる。例えばLantern Road Elementary SchoolとHarrison Parkway Elementary Schoolは、ともに小学校であり、個別指導を行っているが、前者の学校のESL教師は「遊びを採り入れること」、後者のESL教師は「文法を重視すること」といったように、それぞれ力点を置き方に特徴が見られた。またFisher Junior High SchoolのESLクラスのように、日本人の生徒同士で日本語でのコミュニケーションも可能なところもあり、こうした環境においてはESLクラスとしての英語教育の機能が問われるかもしれない。そもそもアメリカの学校の授業は、日本に比べると教育行政が分権的であることから、概ね学校の裁量あるいは教師の指導観が、授業の様式に大いに反映されやすいものといえる。

何人かの子どもたちからは、ESLが自分の英語の学習には役立っている(あるいは役立っていた。)という話を聞くことができた。一方で、「自分が所属するESLクラスには、わかりやすいグラマーのテキストが使われていない。もうすこし、グラマーを詳しくやってほしい。(現地校8年・男・在米2年5カ月)」「アメリカに来た頃のESLは、役に立たなかったということはないけど、すごく役に立ったということもない。(補習校高3・女・在米8年)」という声も聞かれた。ESLクラスが渡米して間もない子どもたちに対する英語教育の重要な拠点であると考えれば、子どもの適性とESL教師の授業の進め方との相性は、子どもたちの英語学習の成果を左右する重要な要因であることだろう。

②ESLクラスのない現地校

海外在留者の少ない地域もあり、ESLクラスが常設されていない学校もめずらしくはなかった。ESLクラスのない学校で、海外からの子どもが来た場合は、学校ごとにいろいろな対応を行っているようであった。

例えば、筆者は直接訪問しなかったが、週1回1時間のミニESLクラスを新設したりする学校があるという話をうかがった。あるいは基本的にESLは設けず、下級生が授業中にトラブルを抱えると、その下級生の第一言語を話せる上級生が呼ばれて、サポートをする体制に

なっているところもあるということだった。ESLの常設されていない学校での、子どもたちの言語面の発達について、ESLのある学校との比較を通じて、詳細に検討する意義はあると思われる。

③日本人の少ない現地校

現地校によって、日本人が在籍する人数にも違いがある。筆者が以前行ったデトロイト(梶田ら、1999を参照)においては、ひじょうに多いところだと、130人ほどの日本人が所属しているところもあった。インディアナポリス周辺の現地校では、学校全体で数人しかいないところが多い。現地校での日本人同士のコミュニケーションというものがほとんど行われななかで生活すると、現地の子どもたちと関わることを余儀なくされる。それゆえに、現地とのつながりを密にするチャンスにあるともいえる。しかし、英語の力も十分に備わっていない状況で、そうした環境にいきなりとびこんでいくことは、大きな挫折感につぶされることがあるとも思われる。

Fさん(前出)は、小学校4年生の時にアメリカに来ている。「アメリカに来て最初に通った学校は、過去に外国人を受け入れたことのないところでした。私が入るということでESLをつくってくれたりはしたんですが、それでも私への対応の仕方が分からなかったようで、お互い気持ちのすれ違いみたいなものがありました。それで登校拒否などもしたんです。学校のカウンセラーの方がかが家にいらして、話し合いの結果、日本人のいる他の学校に転校することにしました。新しいところでは、他の日本人が助けてくれました。」補習校の先生の話によれば、現在の彼女は日本語、英語ともに高い力をつけており、学業でも優秀な成績をあげるまでにいたっている。

アメリカに移り住む子どもたちにとっては、まずは中心的な生活空間であるアメリカの学校へ適応していくということを通じて、アメリカ文化へ適応していくことになるといえる。所属する現地校のシステムがいかなるものであるかが、彼らの学校生活、ひいてはその後のアメリカでの生活への適応に影響を及ぼす要因のひとつになっていると言ってよいだろう。

3. 家庭での支援

子どもたちのアメリカでの生活を支える存在として、家庭の役割は大きいと思われる。「こっちに来た当時は、学校で先生や他の人が何を言ってるのかがわからなかったので、すごく怪しい思いをしていました。ただうちの父が英語がわりとできるということもあって、父に『これは何て言うの?』とか聞いたりして、現地校の勉強を見てもらってました。父は私の勉強を全面的に見てくれ

ていたので、すごきたいへんだったのだろうと思います。(補習校高3・女子・在米8年)」と、渡米当時のことを振り返って語ってくれる生徒もいた。

筆者が訪問したCarmel Junior High Schoolで交換留学生のサポートなどを担当しているカウンセラーに話を聞いた。……日本人の親は、子どものサポートをしっかりしている。自宅では英語や学習活動のtutorを雇っている家庭が目立つし、子どものことで学校との話し合いをすることにも積極的である。しかし日本の子どもでこちらに適應できなかった例もあった。その子どもは、アメリカに来る前は勉強ができる子どもだった。しかし渡米後、英語が理解できないということからフラストレーションをためたようで、不登校となった。家庭と学校との話し合いをする機会は少なかった。結果として、その子どもは母親と帰国することになった……といった内容のことを話してくれた。

一般的に子どもが家庭で過ごす時間は、学校で過ごす時間よりも長い。子どもが家庭ですごす時間の中で、親は子どもとどう関わり支援するかということが、彼らがうまく学校生活を送れるかどうかにも影響するようである。

4. 情報メディアの普及

インターネットや携帯電話が普及するにつれ、渡米している日本人の子どもたちの様子にもしだいに変化が現れてきているようである。インディアナに住むの日本人の間でも、インターネットや携帯電話はかなり普及している。その上、日本に比べて使用料金もかからない。こうしたメディアを日本人の子どもたちは、たいへん利用しやすいのである。

補習校で10年近く日本の子どもを見ている先生が、次のような話を聞かせてくれた。「今の子どもに比べると、5年前の子どもの方が、もうちょっと現地にとけ込もうとしたか、あるいは勉強していたと思います。例えば私がよく覚えている子で、引込み思案で特別勉強やスポーツができるほうでもなかった男の子がいたんです。『僕はアメリカではダメだから、日本に帰って日本で旗を揚げる、どうにかする』って言うような子どもでした。でも彼は彼なりにこっちの生活になじもうと頑張っていましたのが印象的でした。ところが、今ではそういったタイプの子が、Eメールで簡単に日本語を使って愚痴をこぼしたりすることができるんです。インターネット上で知り合った同じ悩み、境遇を持った友達とやりとりができ、そこから抜けられていない様子の子どもがいます。そうした子どもから、私のところにもメールが来ます。私のパソコンは日本語が使えないよと伝えて、英語

を書かせようとはするんです。でも、ローマ字で日本語を打ってくるんですよ。『先生、つまらないよ〜、何もすることがないよ〜』みたいな感じで。しかも、3年前なら持ってなかったでしょうが、最近ではほとんどの子が携帯電話を持っています。日本人同士のつきあいの時間が長くなっていますね。』

現地で英語を使わなくても、日本語でコミュニケーションをすることが容易で、日本の出来事についても、インターネット、日本の番組が配給されるテレビなどで即座に知ることができる。情報メディアの発達には、子どもたちにとって、異文化での適應過程で疲れたときの拠り所を生み出したという言い方もできる。ただ、その地で学び、適應することを放棄してしまった子どもにとっては、いわば異文化からの逃げ場として機能しうようである。

III 子どもたちそれぞれの属性

1. 心理・行動的側面

子どもたちが異文化の地に適應していく上で、どういった心構えを持ち、活動していくことが重要であるのか。このことを探るために、まずは「もしも日本人のお友達がアメリカに来ることになって、こちらでうまく生活していくためのアドバイスをするならば、あなたは何か言えますか?」という補習校高等部の子どもたちへの質問に対する回答を中心に考えてみたい(以下、ことわりのない限り、「」内の言葉は、上の質問への回答を表している)。

①積極的に関わりを

まず、現地の仲間と積極的に関わりを持ち、友達をつくっていくことの重要性について語られるのが目立った。

- ・「困っていることがあれば何でもまわりに聞くようにすることです。(高2・男・在米8年)」
- ・「自分からしゃべろう、ですね。部活をしたら友達ができやすい。(高1・女・在米1年半)」
- ・「話しかけられたら逃げちゃダメだよ。しゃべれなくても、いちおう笑っておこうって感じです。だって、こっちが応えなければ、それからしゃべりかけてくれなくなるもん。(高1・女・在米5年)」
- ・「積極的にこちらの人に話しかけたり、自分を出していった方がいいですね。それを通じてコミュニケーションをとれるし(高3女・在米8年)」
- ・「やっぱり友達をつくること。バカと見られようとも愛想よくする方がいい。(高1・男・在米2年半)」

困ったことでも何でも、自分から積極的に話しかけ、また一方で話しかけられたらできる限りそれに応えるという姿勢が、現地での友達をつくり、現地ですぐうまくやっていく上で重要であることを、彼らは身をもって実感し

ているようであった。部活などの場に自主的に参加していくという積極さも、現地の仲間と関わり友達をつくる上で役に立っているようである。「しゃべれなくても、いちおう笑っておこう」「バカと見られようとも愛想よくする方がいい」という話からは、現地の仲間と関わる上での彼らのいじらしい努力、工夫がうかがえる。

②失敗をおそれず

- ・「あまり完璧主義にならないで、積極的に自分を出していくことですね。(高3・女・在米8年)」

「完璧主義」であることは、異文化に飛び込んでくる子どもたちにとって、その地での積極性をためらわせることになることが理解できる。英語力が十分でないのだからうまくコミュニケーションがとれずに失敗するのは当たり前だ、という割り切った心構えがあるかどうかは、現地の仲間と積極的に関わるができるかどうかを左右することだろう。先の「バカと見られようとも……」という回答にもあるが、高い自尊感情に縛られず、失敗への否定的評価をおそれないことが、異文化に適應する上で彼らに求められる心構えと言える。

③のんびり気楽に

- ・「のんびりやったらいいと思う。日本みたいに毎日何時間勉強するとか、分刻みで動くとかじゃなくて。アメリカでまともに勉強しろっていうのは無理だから。(高1・男・在米9カ月)」
- ・「いろんなたいへんなことがあるけど、すべてを真剣に受けとめずに、気楽に考えるようにした方がね。(高1・女・在米5年)」

異文化で直面しうる多くの問題を全て引き受けることは、子どもたちにとって、並々ならぬ負担になるものと思われる。適度な楽観性を持つことにより、ストレスをため込まず、自らの心理的な安定を維持し、その後の異文化への適應プロセスを円滑なものにするのかもしれない。

④好きこそものの上手なれ

補習校の小学部5年のGさんは、「私、おしゃべりだから下手でも英語しゃべるの。仲良しだったら、ゆっくりでも聞いてくれるし」と話してくれた。小学部2年と4年(ともに男子)の母親であるHさんは、アメリカに来て4年になられる。「英語の習得は下の子の方が早い。下の子は上の子に比べると、おしゃべりをするのが好きなタイプからかもしれない。性格によって、子どものアメリカでのなじみ具合が違うのはたしか。」と話された。ともに、おしゃべりをするのが好きであるということが、英語の習得に役立っている例を示す話といえる。

Fさん(前出)は、日本語で書かれた本で、ロシア文学をはじめいろいろなジャンルの本を楽しむ読書好きと

いうことだった。「(英語の本については)得意というわけではないんですけど、読むのが好きなんで、時間があるときは読むようにしています。」と語っていた。

「おしゃべり好き」「読書好き」と言い表すことができるような、「話す」「読む」に対する興味、関心に基づくモチベーションの高さは、少なくとも彼らが現地で英語を習得する上で、大きな威力を発揮しているものと考えられる。子どもたちが抱えている興味や関心事が、英語の修得や学習課題とうまく関連づけられれば、彼らの異文化での成長は大いに促進されることであろう。

2. 渡米時期・在米年数

補習校高等部の生徒たち7名と一緒に話をしていた中で、次のようなやりとりがあった。6名までが在米5年以内の生徒で、1名は日本の小学校に通った経験のない在米9年になる生徒(I君)であった。

Aさん:「アメリカ人って短気なんだよね。自分勝手だから。」

I君:「え?、アメリカ人が?」

Eさん:「自分さえよければ良いと思ってるんだよね。」

人のことあまり考えて行動しないんですよ。」

I君:「友達がいたら、考えてくれるよ。」

Eさん:「それはベストフレンドでしょ。全体的に考えての話だよ。」

I君:「ベストフレンドじゃないよ、いっぱいいるよ。ふつうの友達のなかにも。」

D君:「ここの生活が長いからそうやって思うんだよ。」

Jさん:「まだ浅いと、表面だけの会話しかできなくて。相手の考えてることが分からないの。」

筆者:「I君、あなたが日本人か、アメリカ人かと言われるたらどう答える?」

I君:「さあ〜……」

Aさん:「どっちで生活したいかって言われたらどうする?」

I君:「アメリカ! アメリカ。」

筆者:「他の人は?」

I君を除く全員:「日本!」

I君:「え〜なんで〜?日本に慣れた人には(アメリカのことが)わからないんだよ……」

「日本人」か「アメリカ人」という問いに対しては、I君はしばらく考え込んでいた。しかし、在米5年以下の生徒たちがアメリカ人との間にある隔たりを感じ、日本への帰属意識を感じていたのに対して、I君はアメリカ人への不満が当を得ていないという立場を取り、アメリカの生活の良さをはっきりと主張していたのが印象的であった。渡米時期と在米年数が他の生徒よりも早いI

君にとって、アメリカの人々および風土は、他の6名にはみられないほどに、肯定的なものとして位置づけられていることがよくわかる。

3. 性別

先に「情報メディアの普及」のところでは話を引用させていただいた先生からは、次のような話もうかがった。「たまたま私が持った生徒がそうだったのかもしれませんが、恥をかきたがらなくて（現地の仲間と）とけ込めない子は、女の子よりも男の子の方が多い気が。女の子の場合、たとえ英語の力とかが低くても、ちやほやされることがあるようなんです。それで、日常会話はできるようになりやすい。男の子って（現地の仲間から）ちやほやされないんですね。……それで相手にされなくて、よけい引っ込み思案になる。それでアメリカ人は俺たちのこと嫌いなんだとかって否定的になる……。（そんな愚痴を）しょっちゅう聞きます。そんなにひねくれた子たちではないんですけど……。」

コミュニケーションが他者との相互作用ということを経験すれば、子どもたちの性別が、周囲からの関わり方を規定している可能性は否定できない。特に生活言語を学ぶことから求められる子どもたちにとって、彼らを取りまく現地の仲間たちがどのように接してくるかということが、子どもたちの内面的な性質を越えて異文化適応過程に影響しうることを、こうした話より推察することができる。

4. 日本人として

Kさんは、補習校で小6になる娘を持つ母親である（在米5年半）。「6年生の授業で、World War IIの話が出てきたりすることがあるんですね。子どもはすごく嫌な思いをして帰ってきました。こちらでは、自分の過去、先祖のことを話すのが結構好きみたいなんです。何代前のおばあちゃんが南北戦争とかWorld Warの記録を持っているという話になっちゃって。そこから、『日本は、Peril Harborでどうして卑怯なことをしたんだ、お前のおじいちゃんも行ったんじゃないか』ということを言われたようです。（その後、娘が学校で偏見を受けたことについて、Kさんの近所のアメリカ人に相談したら、『そんな偏見はよくない』と、学校に授業での対応を求めるようにサポートをしてくれた、とのことだった。）」

日本の学校で授業を受ける限りにおいては、こうした体験をすることはまずないだろう。こうした話が示すように、異文化において、子どもたちは「日本人」として意見を求められたり、評価されたり、偏見をぶつけられ

たりすることがある。偏見を伴った体験は、彼らにとってひじょうに辛いものとなることであろう。しかし、様々な文化背景にある人々からの「日本人」への視点をじかに味わい、それに対して情緒的に刺激を受けることを通じて、日本について、日本人の自分について考えるきっかけになることだろう。「日本人とは」という問いを通じて、自分という存在を見つめ、アイデンティティを探求する大きな契機となっていることは間違いない。

IV おわりに—異文化で生じる問題乗り越えていくための指針

今回はインディアナポリスでの9日間の滞在で、日本人の子どもおよび彼らを取りまく人々へのインタビューを行った。そして、子どもたちの異文化適応のあり方を規定しうるさまざまな要因を探り、インタビューの内容をもとにまとめた。

異文化適応に影響する要因として、本報告では「子どもを取りまく環境」の要因と、「子どもたちそれぞれの属性」の要因という形で整理してみた。ただ、子どもたちの異文化適応のプロセスで生じる問題に一人ひとりがどう向き合っていくことが必要であるかということを考えていくのであれば、現地でいかに子ども自身、あるいは親および周囲の大人たちが、実際に操ることのできる影響因であるかという視点、言い換えれば要因の統制可能性という視点から整理しなおしておくことは意義があるだろう。そこで本稿では最後に、今回の調査の結果を参考にしながら、要因の統制可能性という視点に基づいて考察してみることにする。そして、今後海外で生活することになる子どもたちおよび家族を念頭に、海外在留をする者の心構えについて、一つの指針を提示してみることにしたい。

子どもたちの異文化適応のプロセスを考えるにあたり、最も統制可能性の高い要因は、子どもたち自身の心理的・行動的側面であるだろう。筆者が接してきた子どもたちは幸いしっかりしており、彼らの話からは、自分が異文化の地でどのように生きていくべきかについて、経験を頼りにしながら見出していることがうかがえた。さまざまな子どもたちが、それぞれの経験をもとにして、「自分から……」「積極的に……」「完璧主義ではなく……」「のんびりと……」といったことの重要性を語っていた。経験に裏打ちされたコメントだけに、たいへん重みがある。こうしたコメントには、彼らが異文化の地でたくましく生きてきたことを示す証を見て取ることができる。海外へ在留する次なる子どもたちへ勇気をもたらすメッセージといえるだろう。

子どもたちの住む地域の特徴、通う現地校の日本人の

数など、生活環境の枠組みの要因は、親の駐在先によって大きく規定される。駐在先を子どもが選べない以上、子どもはこうした生活の枠組みを自らが統制することができない。与えられる生活環境をほとんど無条件に受け入れながら、自分たち自身が積み上げる経験を頼りに異文化での日々を送ることになる。ただ、それでも子どもたちが息詰まっている場合、彼らを支える存在として、生活の大半を共にする家族、とりわけ親の役割は大きいと言わざるを得ない。子どもの様子を家庭で見守り、時には英語や学業面のサポート役になることができる。また必要に応じて、現地校のカウンセラーや教師とのコミュニケーションを適宜行い、意見することもできる。一例であるが、筆者は在米1年を満たないMiddle Schoolに通う生徒の御両親と、履修教科を担当する5名の教師との間で行われた面談に立ち合わせていただく機会も得た。学校側がその生徒にSocial Studyを取らせることを提案する一方で、御両親の立場としては自分の子どもに負担がかからないかという懸念があるということで持たれた話し合いであった。30分ほどの話し合いを経て、3週間だけ新しいクラスを試させるということで話は落ち着いた。父親は、「現地校の先生は、上の学年で成功するのを期待して、高い能力を身につけさせようとしてくれます。しかし、日本人にとっては、帰国して日本の学校に入ることが前提です。そのためには負担がかかって落第することのないようにすることが大事なのです。そういった点を現地校に理解してもらわなければいけないのです。」と話してくださった。つまり子どもに対する現地校の方針と、帰国を前提としている日本人の考えとの間にはギャップがあるという。学校で子どもに課されているカリキュラムについて理解しながら、子どもの立場と学校側の要求との調整役を果たすことができるのは、子どもたちの親なのである。さらには、現地校のESL教育のあり方や子どもの現状を踏まえながら、転校させるべきかどうかというのも、親が判断してできることがらである。子どもが困難に陥ったときに、親の立場からならできることは多い。

日本人であるという要因については言うまでもないが、

海外へ渡ったときの子どもの学年、居住する都市の特徴についても、異文化適応のあり方に影響する要因であるといえる。また、日本にいた頃からのもとの性格や学力が、現地での対人関係や学習面の成果に大いに反映しているといったことを、実際に長期に渡って子どもたちを見てきた親御さんや補習校の先生方が話されていたことも印象に残っている。親の立場としては、どういった影響が自分の子どもの場合にはもたらされるのかを、海外在留前からあらかじめ踏まえておく準備はあってもいいかもしれない。なお、海外在留前の子どもの特徴と、在留後の適応のあり方との関連について、実証的な資料等を踏まえながら明らかにしていくことに力点を置いた研究は、海外在留を控えた親が、自分の子どもの異文化での振舞いをあらかじめ理解するための材料を提供するという点で、重要性を持っているものと思われる。

子どもたちが営む日常生活は千差万別であり、しかもそうした生活でのエピソードの一つひとつが、何らかの形で異文化への適応過程に影響している。つまり究極的に言えば、各子どもたちの体験、そこから生じる問題は、それぞれが一回きりのものであることも疑い得ない。とはいえ、先に示したように、海外在住を経験中の子どもたちは、「自分から……」「積極的に……」「完璧主義ではなく……」「のんびりと……」といった、共通性の高いメッセージも伝えてくれている。こうしたメッセージもヒントにしながらか、あくまで自信を持って異文化と関わり続けることで、結果として異文化で直面する問題を乗り越える力をつけていき、深みのある人間に成長していく可能性が見えてくることであろう。

文 献

- 梶田正巳・佐藤郡衛・松本一子・川上綾子・杉村伸一郎
・西口利文 1999 北米地域に在住する海外日本人児童・生徒の異文化適応調査研究 名古屋大学教育学部紀要(心理学) 46, 1-51.

(2001年9月20日 受稿)

ABSTRACT

Japanese Children Living in Indianapolis

Masami KAJITA and Toshifumi NISHIGUCHI

The purpose of this research is to point out problems in relation to the Japanese children living in North America.

To accomplish this research objective, interviews were conducted. The interviews were taken place in association with an Indiana Japanese Language school where approximately three hundred Japanese children attended every Saturday in 1999. Interviewees were of the following: children who go to Indiana Japanese language schools as well as their Japanese school teachers, local public school teachers, and parents.

The overall similarity found was that almost all of them go to American public schools from Monday through Friday. However, ESL (English as a Second Language) education services for the children at the public schools and the support that they receive at home varied tremendously.

Through the interviews, the authors of this project found that the environment surrounding the children seemed influential as to whether or not they can adapt to the different cultural surroundings and society.

Additionally, it was likely that the problems concerning their potential language skills, academic achievements, and identities could be influenced by the following factors: characteristics of their mental and behavioral attitudes as well as the time of their arrival to North America and their gender.

Key words: Japanese Overseas, language skill, academic achievement, identity.